

みんなの心に輝く学校をめざして「足利市立西中学校」

「不登校の理解を深めるために」の資料は、山前小と三重小の保護者に配布(昨年9月)したものです。中学校では不登校が急増しますが、その兆候は小学校段階で現れることが少なくありません。

不登校には早期発見と早期対応が有効です。この度、不登校を一人も出さない学校にするため、資料を配布いたしました。皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。(平成21年3月)

不登校の理解を深めるために

この文書は、保護者向けに作成(10年前)したのですが、今まで、ほとんど配布されることがなかった教職員だけの資料でした。

この資料は「いじめによって起きた」と特定できない不登校を考えるためのものです。この国から、不登校が一向に減らないのは、不登校の理解が不十分で、適切な対応ができないからと考えています。

不登校の現状

毎年、不登校生徒(年間30日以上欠席)の人数や割合が、新聞やテレビなどで報道されますが、準不登校生徒(15日~29日の欠席)も相当な数になっており、無視できない状況です。

平成18年度の不登校中学生は、全国で、103,069人、生徒全体に占める割合は、2.86%でした。栃木県は、2,024人、3.52%、足利市は、162人、3.87%でした。(小学生は、全国...0.33%、栃木県...0.40%、足利市...0.32%)

不登校は病気ではない

登校拒否症と言われたことがあった影響か、学校に行かない(行けない)というのは普通じゃない。だから病気と考えられてしまったのか、あるいは、朝になると、頭痛や腹痛を訴えたり、微熱がでる生徒が確かにいますので、病気と考えられてしまったのかもしれません。しかし、医者には、ほとんどの人が身体的な異常はない、と言われるようです。服薬などをしても直らないのです。

朝、頭痛や腹痛、微熱等の身体症状が出るというのは、嘘ではありません。心の問題から身体に症状が現われるのは、時に大人も経験することです。極度の緊張で、胃がキリキリと痛むなど。

学校を拒否しているのではない

10年くらい前までは、登校拒否と言っていました。登校したいのにできない(「明日は学校に行こう」と準備をし、床に入りますが、朝になると、行けなくなってしまう、といった例はたくさんあります)、登校意欲がわからない、集団に溶け込めない、といった場合がほとんどで、拒否ではないのですから、呼称変更は適切でした。

不登校を登校拒否と言っていたのでは、「現在の学校には多くの問題があり、そのために生徒が登校を拒否している」との認識をもつ人も出てくるでしょう。学校に改善すべきことはたくさんありますが、間違った認識からは、間違った対策しか出てこないと思います。

不登校はいじめによるものか

「学校には、そんなにいじめがあるのかい?」「不登校の原因はいじめなんだろう」と聞く人がいます。しばしば報道されるいじめと不登校が結びついて、不登校の原因をいじめと考えてしまったようです。

いじめが横行する学校なら、いじめによる不登校は多くなると思います。しかし、いじめが減っているのに不登校は増加していますし、いじめがなくても不登校は起きているのです。

どの子にも起こり得る

文部省は、不登校に対し、「どの子にも起こり得る」との考えを示しました。不登校問題の認識が深まってきた現在では、「特異な子どもの特異な行動」と考える人はほとんどいないと思います。「どの子にも起こり得る」とは、どの子も不登校になる可能性があるから注意しなさい、という意味ではありません。「どの子にも起こり得る」との認識の下、学校・家庭・社会のそれぞれが教育を見直していくことにあります。

不登校は、「学校教育の今日的課題」と言われている

学校だけの対応で解決できる課題ではありません。「むなしい家庭、忙しい教師、冷たい社会」などと言われたりもする現在の状況を考えれば、「家庭や社会の今日的課題」とも言えるのです。

しかし、私たちは、不登校の原因が、家庭にもある、社会にもある、と責任転嫁をするつもりはありません。不登校の子をもつ保護者は、ほとんど例外なく、悩み苦しんでいるのです。どうしたらこうした保護者の力になることができるのか、といつも考えているのです。

学校教育の今日的な課題とは、不登校への認識を深め、悩み苦しむ保護者や生徒に、有効な支援ができる力を私たちが身につける、ことと理解しています。

不登校にもいろいろ

一口に不登校といっても、

- ・ 学校生活に起因...いじめや嫌がらせ等、明らかにそれと理解できる学校生活上の原因から登校できない。
 - ・ 遊び・非行...遊ぶためや非行グループに入って登校しない。
 - ・ 無気力...何となく登校しない。迎えに行ったり、強く催促すると登校するが長続きしない。
 - ・ 不安などの情緒的混乱...登校の意志はあるが、身体の不調を訴え登校できない、漠然とした不安を訴え登校しないなど、不安を中心とした情緒的混乱によって登校しない。家から一歩も出ない、出る時は友達に合わないような方面だったり、あるいは自分と気づかれぬ服装をして出るなど、人目を極端に気にし、かなり神経質になっている場合は多い。
 - ・ 意図的...学校へ行く意義や価値を認めず、自分の好きな方向に進んでいる。
- その他、上記の複合されたものなど、さまざまな形の不登校があります。

不登校のきっかけ

不登校の直接的なきっかけには、

- ・ 友人関係...いじめやけんかなど。
- ・ 教師との関係...強い叱責や注意など。
- ・ 学業不振...成績不振や授業が分からない、試験が嫌いなど。
- ・ 部活動の不適応
- ・ 転入学や進級時の不適応
- ・ 校則をめぐる問題
- ・ 家庭生活の急激な変化...父親の単身赴任や母親の就労など。
- ・ 親子関係...親の叱責や言葉、態度への反発など。
- ・ 家庭内の不和...両親の不和、祖母と母親の不和など。
- ・ 病気による長期欠席など、さまざまなものがあります。これらによって不登校が誘発されることになります。ここで留意すべきことは、きっかけを真の原因にしてしまうことです。原因は別のところにあります。

不登校の原因

不登校は、学校、家庭、社会環境が複雑にからみ合って起きるもので、原因はそれぞれ、したがって、対応もそれぞれ、不登校に対応する教科書はないと言われています。

学校

年間200日前後登校し、980時間の授業を行います。そのために、各教科、道徳、学活、総合的な学習の時間によって編成された授業を、1日5～6時間行うことになります。また、「受験競争」が少なからず重荷になるのかもしれません。

家庭

忙しすぎて子どもの話を十分に聞いてやれない状況があります。迎えてくれる家族のいない家に帰る子どもも大勢います。逆に、少子家庭のため、保護者の手が行き届きすぎる、という面も出てきました。また、核家族の増加により、お年寄り（子育ての大先輩）の知恵が十分生かされない、という面もあります。

ここで断わりしておきますが、お年寄りのいない家庭はダメと申し上げている訳ではありません。お年寄りの存在価値は、確かにあると言いたいのです。

社会

外で遊ぶ子どもが少なくなっています。遊び場が少ないことや安全面の問題、あるいは、学習塾通いなどが増えて、遊び相手がいないこともあるようです。したがって、家の中で過ごすことが多くなります。また、不健全な雑誌などが簡単に手に入る状況も出ています。

諸々のことがからみ合った環境の中で、子どもは発達課題（成長の過程には、それぞれの時期で達成しなければならない課題がある）の不履行という状態にあったのです。そのため、生きる力が培われなかったと考えています。

生きる力

- ・人間関係を築く力
- ・障害を乗り越える力
- ・失敗を恐れない態度
- ・善悪の判断力
- ・ねばり強さ
- ・礼儀作法
- ・その他(生きるために必要なこと)

教科書はないというのは、解決策がないということではありません。生きる力を培うのですから、遅すぎるという心配もいりません。

不登校のきざし

家庭	学校
・ 何度起こしても起きてこない。 ・ 支度が遅くぐずぐずしている。 ・ 朝になると体の不調を訴える。 ・ 元気がなく表情が暗い。 ・ 午後になると元気が出る。 ・ 生活のリズムが乱れてくる。 ・ 外出しなくなる。 ・ 登校をしぶる理由が分からない。 ・ その他	・ ボツンとしていることが多い。 ・ 生活に正気がなくなる。 ・ オドオドした様子が見られる。 ・ 遅刻、早退、欠席が増えてくる。 ・ 学習意欲がなくなる。 ・ 自信がなく存在感がもてない。 ・ 部活動を休むことが多くなる。 ・ 消極的で自ら行動しなくなる。 ・ その他

責任を外に求めない

子どもが不登校になると、誰もがその原因を突き止めようとしますが、ほとんどははっきりしません。そこで、ほんのささいな出来事をとらえて、責任の全てを外部に求め、追及するようなことをすると、子どもは益々登校しづらくなります。

不登校を直すのは本人自身です。そのために、関係者が連携し知恵を出し合うことが大切です。外部にばかり責任を求める姿勢は、この連携を妨げます。いつまでも、不登校解消のスタートラインに立てません。

上手な対応には

不登校は必ず直りますし、正常な反応と考えています。自分づくりのために、「時間をください」と言っているようなものです。専門家の中には、「不登校を祝福したい」と言っている人さえいます。子どもが、不登校を起こすことによって、子ども観や人生観、あるいは、教育観が変わり、子どもと共に周囲の大人たちの人生も豊かになる、とのことだそうです。

短期間の劇的な改善はほとんどありません。つらいかもしれませんが、子どもを信じてじっと待たねばなりません。保護者は自らの不安や焦りを解消し、人生を楽しむ心持ちが必要です。保護者が元気(元気になるまでが快復)になれば、不登校が直るのはもうすぐです。

子どもを不登校にするには

少ない事例(25例)からですが、家庭教育という観点でまとめた(平成8年作成)ものです。この通りにやれば、間違いなく不登校にすることができる、と足利市のスーパーバイザーであった足工大の須田先生は肯定しました。
<教師用資料のため未配布>

1 わがままな子どもにする

わがままな子どもにするのは簡単です。欲しい物は何でも買ってやるなど、子どもの要求をどんどん聞き入れるのです。聞き入れれば入れるほど、わがままになります。

わがままな生活を続けていけば、親をうまく操縦する技術が身につきます。成績を向上させたい、あるいは、学校へ行ってほしい、といった親の気持を逆手にとって要求を出すようになります。また、責任転嫁の行動様式も身につきます。親は子どもに振りまわされる毎日といった具合になります。しかし、外では通用しません。人間関係を上手に結べなくなるのも当然です。学校は、こういう子にとってストレスのたまるところでしょう。したがって、わがままな子どもは、不登校をするようになっていくのです。

2 子どもを(徹底して)かわいがる

子どもはとにかくかわいがり、世話をします。かわいくて、いつまでも添い寝がやめられない母親がいます。中学生になっても続いている例がありました。添い寝をすることで、母子に一体感が生まれます。自立を遅らせることになるのです。トイレにも一人で行けなくなってしまいます。

また、かわいくて叱ることができないし、泣かせたくないの、宿題など、子どもがやるべきことを、親が全部やってしまうことも起きます。

かわいい子どもですし、心配なのは分かりますが、限度を越えた世話は問題です。毎日車で送迎をしたり、体温計を持ち歩かせたり、「転んだ子を抱き起こすな」との先人の教えは、忘れられているようです。

人間が成長するためには、その時その時で、自分でやらなければならないことがあります。世話のし過ぎはそれを奪うことにもなり、ひ弱で神経質な子にしてしまいます。他人と満足に話もできない人間関係を上手に結べない子になっていきます。周囲の子が、とても大きな存在として映るようになり、自信を失っていきます。そして、不登校になっていくのです。

3 親の意のままに育てる

子どもを立派に成長させたいと思うのは誰しも同じです。そのために一生懸命やっていることが、意図した方向とは違う方向に子どもを追いやってしまうことがあります。子どもの心が見えず、親の価値観を強要してしまうからかもしれません。

間違いは誰にもあるのに、厳しく叱ってばかりいれば、極度に間違いを恐れることになるし、成績重視の姿勢を貫けば、結果が悪いと自信を失ってしまいます。

親の敷いたレールに乗せて、子どもを育てようとすれば、当然、無理が出てきます。親に

反発するような子どもであればよいのですが、あまり反発しない子であったり、反発を許さない雰囲気があれば、子どもは混乱してきます。

親の顔色をうかがってばかりいて、親の指示したことだけする、親の喜ぶことだけするといった具合で、自己選択、自己判断の機会が失われていきます。自分本来の生き方ではないので、疲れてしまうでしょう。ですから、子どもを意のままに育てていけば不登校にしていまいます。

4 やさしい(だけの)父親になる

「地震、雷、火事、親父」と言われた厳格な父親は減少しているようです。どうしてなのかは分かりませんが、ただ威張っていればよかった時代が終わっているのは確かなようです。

子どもの言い分は何でも信じて疑わない、そして、友達のような関係を追い求める姿勢は、子どもの自立を遅らせることになります。いろいろなものの見方・考え方を示し、独りよがりな部分を改めさせたり、わがままを許さない厳しい姿勢も必要です。何でも話を聞いてもらい、叱られた経験もほとんどない子どもにとって、外の世界での注意や叱責には、堪え難い屈辱感を味わうことにもなるでしょう。順応できなくなっていくます。ですから、父親がやさしく接しているだけの子どもは、不登校をすることになります。

子どもは、やさしさだけでなく、厳しさもある頼りがいのある父親を求めているのです。

5 父親が子育てにかかわらない

子育ては母親の仕事と考えているのかもしれませんが、厳しい仕事に耐え、一家を養っているのだから当然と考えているのかもしれませんが。子どもに、問題が生じていても、帰宅したら、一杯飲んで寝てしまう。こういう父親の態度があれば、家庭は乱れてきます。そして、「おまえのしつけが悪い」と怒鳴りつけ、暴力を振るえば、母親は、もう相談できなくなります。母親を追い詰めてしまいます。

子どもは好き勝手なことをし出します。母親に暴力を振るうことだって起きます。基本的な生活習慣は乱れ、登校時間になっても起きません。ですから、子育てに父親がかかわらなければ、子どもは不登校になるのです。

家庭に必要なバランス

河合隼雄前文化庁長官（故人）は、家庭には父性（切るという側面）と母性（包むという側面）の両方が機能しなければならないと言っています。良いも悪いも包み込む優しい面が母性であり、それを許さないような厳しい面が父性です。このバランスはどこの家庭にも必要です。

「厳父、慈母」なる言葉は、この父性原理、母性原理が機能する家庭を示唆したものと思います。バランスが崩れると、いろいろな問題が生じることになります。不登校も、この観点で考えることができます。